

そして第十章。宗近一との縁組を断るべく謎の女は宗近家に乗り込む。しかし 20 世紀の処世術を心得た女は内心の毒を隠してあくまでも表面は穏やかである。母の願いは藤尾の夫となる人の実質的地位と財産が保証する自分の身の安泰一点に絞られる。けれどそれを出すのはみっともない。そこで表面を繕って判然としない言い回しで相手に悟らせようとするが通じない。漱石は藤尾の母を、怪しいものを鍋に放り込む「マクベス第四幕一場の第一の魔女」に例えたが、同じようにマクベス第一幕一場の魔女の言葉を応用する。「奇麗は汚い、汚いは奇麗(Fair is foul, and foul is fair)」は心の裏表である。漱石は「内心の悪を穏やかな表面で覆う 20 世紀の処世術」を描き切る。

次の第十二章は再び小野さんと藤尾の戦いとなる。20 世紀の詩人は貧に誇る風流では生きていけない。『文明の詩は金にある』しかし他人の金で優雅な生活を送ろうとすれば道徳が疎かになることもあるだろう。だが小野さんは藤尾という他人の金で孤堂先生への道徳を守るつもりである。そこには欲の正当化がある。ただ小野さんには孤堂先生への気遣いはあっても小夜子に対する気遣いは全くない。恩を知り愛することを知っていても、愛されることを知らない小野さんは『詩趣はある。道義はない』藤尾と同義である。そして漱石はハムレットの「Frailty, thy name is woman(脆きもの、汝の名は女なり)」という台詞を挿入する。愛されることしか知らぬ者の恋は、愛することしか知らぬ者によってしか成就しない。それゆえ藤尾と小野さんの愛は符合する割符である。その間違いない相手であるはずの小野さんが博覧会で自分の見知らぬ女性を連れていた。藤尾の ^{プライド} 我の針は小野さんを突き刺すという ^{たのしみ} 楽を持たねば気が済まない。前章から甲野さんが振る『驚くうちは ^{たのしみ} 楽がある！女は仕合わせなものだ！』という鈴の音は、『楽のないものは自殺する気遣がない』が「楽のある」藤尾は危ないという警告である。これは第六章に続いて放たれた二回目の藤尾の死の予告である。

さて、ここへきてようやく漱石が藤尾という女を殺す準備が整った。もう奇数章・偶数章の区別はない。漱石の筆はマクベスの雨、桜の雨という伴走者と共に最終章へ向けて助走を始める。小野と小夜子、藤尾と一、欽吾と糸子という三組の男女を、マクベスのヒースの荒れ野に、ハムレットの家に、あるいは桓武平氏の末裔の書齋に集めるために。甲野さんが人生の哲学を語る場面はゴール間際に取りしておく。これから勝敗を明らかにするための準備が始まる。

さてそこで第十三章。宗近家を尋ねた甲野さんが糸子と話をする。そこには古代ギリシャの哲学者たちが論じた女性観が漱石流に描かれる。甲野さんは小夜子を「いつ咲いていつ消えるかわからない」目立たない憐れな花に例える。そして糸子を高く評価する。動く女は変わる。娘は妻になると男を管理しようとする。だから糸子は今の良さを失わないために結婚しない方がいいと言う。そして続ける。『藤尾のような女は今の世にあり過ぎて困るんですよ。気を付けないと危ない』『藤尾が一人出ると ^{ゆうべ} 昨夕のような女を五人殺します』 「危ない」のは男に対するばかりではない。女に対しても本人に対しても危ない。さらにその物質の愛は真実の愛に対しても危ない。男を挑発して戦わせれば社会に対しても危ない。いずれにしてもその先には全てを滅ぼす死が待ち受けている。

そして第十四章。小野さんと宗近君が道で出会う。宗近君から藤尾を奪った形で、しかもそれを濠とも気付かぬ宗近君に対して、小野さんは『気の毒』だと思う。それは「自我を没した」素直な気持ちであると同時に自分が背負う罪でもある。『それから』『門』『ころ』の三角関係に現れる恋と罪の関係。人情に絡んで意思に乏しい小野さんの『進むのが怖い。退くのが厭だ』という葛藤が、宗近君と小夜子と藤尾の未来を、そればかりか小野さん自身の未来をも殺しかけている。貧することを厭う 20 世紀の詩

人が金ゆえに真実の愛を殺しかけている。発展のために愛の道はずそうとしている。

その危うい状況を引き継いだ第十五章。20世紀の皮に包まれた藤尾と母の牙はついに行動に出た。母はあくまで世間体の楯に欲の矛を隠しているが、藤尾は攻撃に出る。「20世紀社会の先端を行く人間の価値は、旧態の人生真理を説く哲学者には解らない」と。それはある意味、社会に進出した女性の恋愛観の先端であるともいえる。

そして第十六章。宗近一の父が息子に説明する二種類の鉢。ひとつは「仏見笑」という薔薇の一種で『花は奇麗だが、大変刺がある』植木。もうひとつは源義経への愛を貫き通した静御前を謡った「二人静」という名の『白い穂がきつと二本ずつ出る』植木。この愛の比較は藤尾と小夜子のものである。あるいは後者は甲野さんへの愛を貫き通す糸子の愛のものである。外交官試験を突破した宗近君の未来の選択に対する父の言葉として漱石が語った女の見分け方である。そこから結婚の話が始まり、宗近君は自分の結婚と、欽吾を慕う糸子の結婚を決めるために甲野家へ向かう。

その頃、第十七章では、小野さんが藤尾との結婚を実現すべく浅井に「小夜子を断る」算段を持ちかけている。浅井は僅かな金を借りるために、名前同様「浅い」考えで交渉役を引き受ける。小野さんは是非とも小夜子との縁談を断りたいが故に、孤堂先生が経済的支援を期待しているような詭弁を弄する。これが賢い小野さんが掘った墓穴である。嘘の上に重ねた嘘はどんなに慎重に描いても完全な円には至らない。漱石は浅井の言葉を通して、大団円を迎える甲野家を「ハムレットの家」と定めたことを示す。甲野家には死んだ先王である父の遺影がある。狂気を装う甲野さんがいる。そしてやがてオフィーリアさながらに黒髪を流して横たわる藤尾がいる。甲野さんが語る『父は死んでいる。しかし活きた母よりも慥かだよ。慥かだよ』この台詞は母の貞操のなさを評したハムレットの言葉である。そして甲野さんと宗近君の未来が見える。家を出るといふ甲野さんに宗近君が語る妹の像は、漱石が抱く理想の女性像であると同時に、人間としての真でもある。『糸公は学問も才気もないが、よく君の価値を解している』『糸公は金が一文もなくっても墮落する気遣のない女だ』『糸公は尊い女だ。誠のある女だ。正直だよ。君のためなら何でもするよ。殺すのは勿体ない』

そして第十八章。浅井は小野に頼まれた通りの「破談」を井上家に伝達しに行く。孤堂先生が人間の道徳を問う。『人の娘は玩具じゃないぜ』『如何な貧乏人の娘でも活物だよ』『井上孤堂は法律上の契約よりも徳義上の契約を重んずる…』そこに結婚を物質と引き換えにするなという漱石の考えと、娘を持つ親心が見える。

同じころ小野さんは昼食を摂りながら藤尾とこれから遊びに行くことに気が咎めている。そして「ルビコン川を渡ったシーザーは英雄である」と思う。しかし頭で考えた計画を人情が崩しにかかる。『人は眼を閉って苦い物を呑む』—苦いビールを呑んだ『吾輩は猫である』の猫のように世間の苦さを呑む。小野さんはまだ未来を偶然の運命に託している。そこへ浅井から話を聞いた宗近君が現れて「真面目になれ」と諭す。『真面目になれるほど、自信力の出る事はない。真面目になれるほど、腰が据る事はない。真面目になれるほど、精神の存在を自覚する事はない』『真面目とはね、君、真剣勝負の意味だよ』『人間全体が活動する意味だよ』これはもちろん人生全般に通じることだが、ここで宗近君は「自分も妹も甲野さんもきのう真面目になった」と言う。この真面目こそが全ての欲を取り去った後に残る真実の愛である。藤尾に対して穏便にという小野さんはまだ不真面目である。真実とは時に大きな犠牲を伴う。

そのころ甲野家では欽吾が家を出る支度をしている。世間の自分に対する評価を気にする母と、欽吾の人生を全うさせようとする糸子。考えの出所が違う人間は決して

